



担当業務の内容

私は、震災3ヶ月後の平成23年6月3日から6月8日まで岩手県釜石市に伺い、とある避難所の運営を手伝わせていただきました。1週間ほど職場を空けることになりましたが、同僚も協力してくれ、上司は励ましてくれました。かなりの時間、バスに揺られ着いた先は、公園の前の坂の途中にある避難所でした。少し古めの小さなビジネスホテルを間借りし、20人くらいが寝泊まりしていました。津波は公園まで来ましたが、この坂の途中で止まったそうです。

東北地方は、まだ朝晩は冷え込みます。私も避難所の布団で寝起きしました。夜明けとともに起床し、仮設トイレ脇の真っ暗な道を照らすための街路（燃料はガソリン）のスイッチを切って回ります。仮設トイレを掃除し、日中は避難所の前に出て、自衛隊等からの配給や連絡を逃さないようにベンチのような場所に座りながら過ごします。そこに地元の方々が集い、雑談を交わしました。それは情報交換の場でもあり、癒しの場でもあります。小さなたき火を起こしました。津波とともに街を破壊した磯臭い泥が乾いて風で巻き上げられるため、マスクが必要です。でも、私はあまり付けませんでした。

震災直後の食糧不足は過ぎ、カップラーメンや菓子パンは、もう飽き飽きして喉を通らない時期でした。自衛隊からは毎日の朝昼晩、炊かれた白米が届きます。汁物をホテルのオーナーが作ってくださります。その他、歯ブラシやら何やら、生活に必要なものを取りまとめて自衛隊に要望し、届いたものを皆さんに渡すという仕事でした。夕方に自衛隊がビニールシートで設営し、濃い目の入浴剤で消毒された風呂にも入りました。夜は皆さんと語り合っ、少し大きめな声で「では、おやすみなさい」と言ってから電気を消します。その後も眠れない人が多く、そういう人は外のたき火の前で過ごすようでした。

印象的なエピソード

「津波で溺れるのではなく、瓦礫の波が押し寄せて、それにつぶされて多くの方が命を奪われた」と釜石市職員の方に説明を受けながら、そのブロックや荒々しく砕かれた木材などの瓦礫の山を見ました。「瓦礫で覆われた道を必死に逃げてきた。死体がゴロゴロしていたでしょ。その公園にもね」など、たくさんの体験談を聞きました。3か月経った中にすでに見える希望、可能性、たくましさを自分の目で探したいと決めていましたが、そのような状況ではありません。

ある晩、避難所では下着姿で過ごす、腰の曲がったおじいさんが話しかけてくれました。知っている東京の地名を並べてくださります。これを機に廃業する方も多いそうですが、もう一度スポーツ用品店を再開しようと考えていることを語っていただきました。なぜならば「俺は生かされたから」だそうです。簡易なプラスチックケースに、大金の融資を交渉するための重要書類が入っています。翌日、そのスポーツ用品店に伺うと、泥と瓦礫で大変な状況です。2階部分を見上げると、仕事着に着替え、背筋を伸ばした昨晚の紳士は書類整理に励んでいました。声をかけるのは、やめました。



1週間ですが、多くの方にかわいがっていただきました。物が乏しい被災地に伺いながら、手作り人形（写真）やシャツ、コップ、煎餅等もいただき、何人もの方が手を振ってバスを見送って下さりました。